

30

20

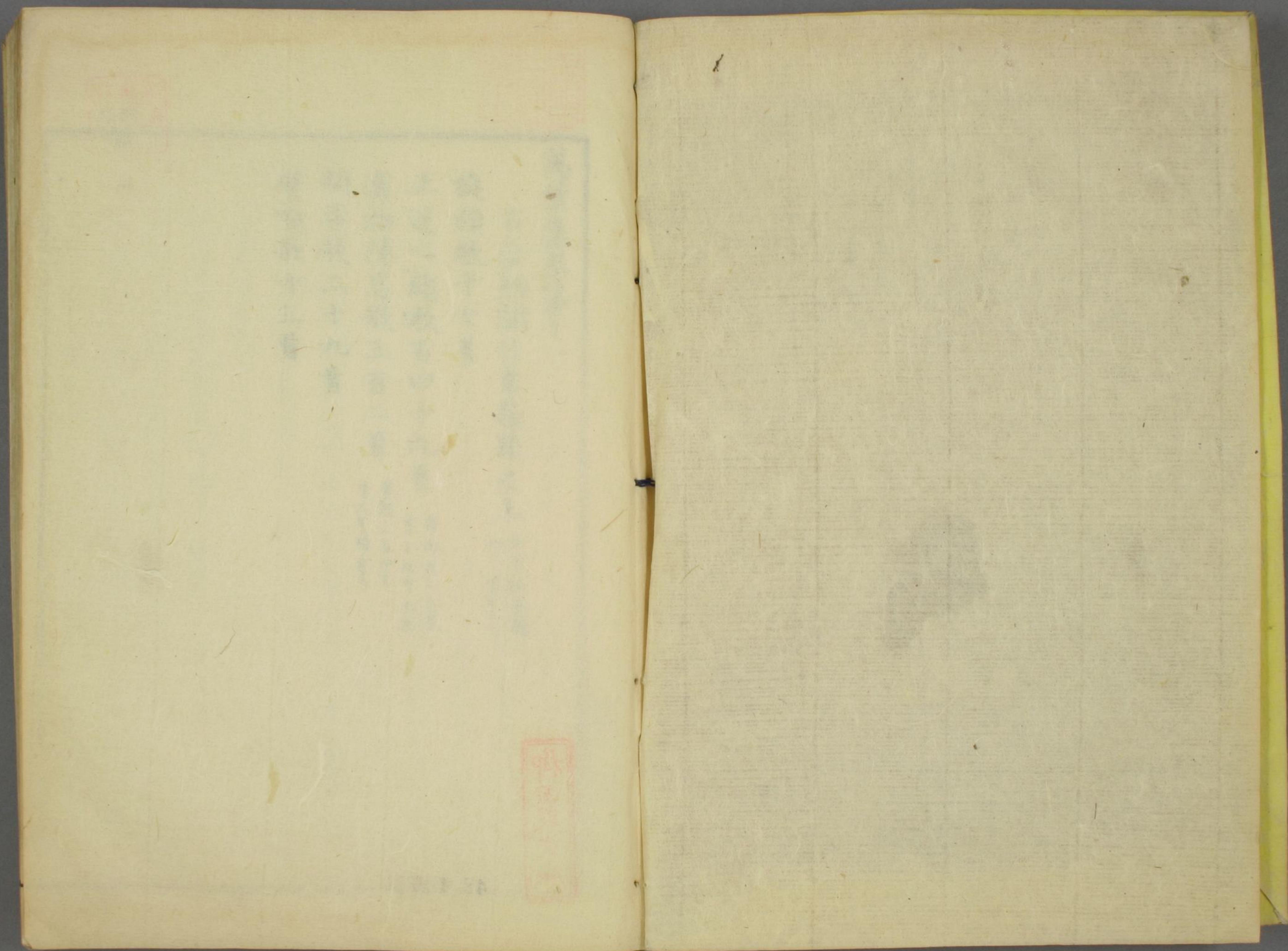
10

1

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN 2 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

柳田文庫
文庫11
A 104
15





文庫11
A 104
15



萬葉集卷第十一

古今相聞往來歌類之上

古本往來類
の三字ちー

旋頭歌十七首

正述心緒歌百四十九首

奇數百三十首
四十九首不足
奇數三百四首
三二首皆是

寄物陳思歌三百二首

奇數三百四首
三二首皆是

問答歌二十九首

譬喻歌十三首

誓命歌十三首

開合歌二十首

萬葉歌四首三首二首

萬葉歌三首二首

五首一卷歌四十六首

五首一卷歌三十六首

貴賤歌十首

古今時聞詠東歌題二首

古今時聞詠東歌題二首

萬葉歌卷十一

一万解十一上目 一

同録古今相開詠東歌類之上と下と此次卷十二の同録同下と
せし、歌數多きれり、上下ともとて古とへ飛鳥岡本の事の半ばよ
く、清御原宮のはまとの事とし、今とへ舊原宮より奈良事の
物うはまとの事をりゆかること、載るる音の體あくとて

旋頭歌

新室壁草刈邇御座給根草如依逢未通女者公隨
にひむろのがへまきかづみれりたまたぬくらうのぞとよらとめを
えひきみのまく

新室壁草刈邇御座給根草如依逢未通女者公隨
にひむろのがへまきかづみれりたまたぬくらうのぞとよらとめを
えひきみのまく、まの草のやどりすうとつうん耕さんとくとくわが室
生もとまくとまく、かくしき出でゆきべし、壁草刈りとよらとめを
ねうたまねはおまくとまく、おまくとよらとめをうありそれりとくつて、

新室・贈静子之・手玉鳴裳・玉如・所照公亭内等白世
にいむろを・みたづのこがたゞまなむ・むねまのと・てくもきみ
を・うちへとまをせ

新嘗年ハ古モ律、のぞむひる乍リム之頭宗紀より室賀詞あり、すく
御事もくなど、出雲國神賀詞又、白御馬能前是爪後足爪踏立
事波、大宮御門柱卒上石根余踏堅采下石根余踏凝立云々、宝龜元
紀の歌垣の序よ、守止妻良尔、卒止古多智穂比布美奈良須尔詩乃
美夜古波与呂豆与乃美夜、もと地よ踏卒ナカ家よ踏靜シテう
うういてもとくちよくよううきへーかくてモ雪のあらヒ静のまことひ
トよ踏靜といひてよううきへーかくてモ雪のあらヒ静のまことひ
みりひま十九、光神鳴波主をとめちどり野歎之男の名すも妹子、

但子ちよ、うへじいとまも、左ハモリモニモ、其ノトキ、たれ
實事あや、ハ序アシテ、幹子ドリト、必留の事アシテ、此モナリ
ヤムトモトキスル内入ヲ、ナシムモ、ナシムモ、小シヒタケシムト、
の事アシムモハ、カカリズ
長谷弓楓下、吾隠在妻、赤根刺所、光月夜廻人見點鴨
をつせみゆつさうがくせらつま、あゆやく、てゐるつゝよう、
ひとみくらうも

長谷弓 標下吾隱在妻赤根刺所光月夜遁人見點鴨
をつせみゆつまがわくかくせらつまあふやくとくよつ
ひとみくらのむ

ゆづきは木石櫛玉、神佛玉瓦石枕繁多、櫛の木のままで、それとかいふ
ちよ、かくら、も櫛のまほにからくらむゆゆゆとけりあくらもべ、
あねきは木石、えくらうハアくらあくらくく

一云人見此門無口

健男之念亂而隱在其妻。天地通雖光所顯目八方。

あらぐとのせひそれてかくせまのつまあめつちよいかで
とじあれりも

大夫の武をもせりれくほや一姓されば身のそをせし事にて
ほれうちもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
ひぐるへういづ、神代紀雄吉とさきけびと川

一云大夫乃思多鷦備氏

惠得五呂念妹者早裳死耶雖生吾邇應依人云名國

うつくわづよひハナヤリモテスルヤハレヨトモハーヒ
との、いたちく

まち、或人ち惠得ハ息縁のほき、まみきんぐうす、
くくじとハドトク行金きく、すいとくはほのぬちもれ、
まゆ中がのタ
とひ伎といふ事

柏錦紐片叙床落邇祁留明夜志将来得云者取置待
こあみさしゆのかくごとこふわちふわもあみのよう、まゆくとい
とくおうてまく人
まくの路と傳もよせーたるべー筆者よ々くアキ、をーのーの加
朝戸出公足結辛閨露原早起出乍吾毛裳下閨奈
あやうでのすみのあみひとぬらもつゆはらもやくおきていて
こくし、まくまくぬくやま

あゆひ改るが、彦原もくもく河もくと段すくもとすくと、今

やくとく國の間の河もく健と墨く建とく新たへ事

何為命本名永欲為雖生吾念妹安不相
なふせもよいのちをわざむたゞくほりせん、いきうそいわがまく
ふ、やもくあいもく

命とよきものと見て行かせん

息繙。吾雖念人目多社吹風有數數應相物
いきのとよより、むすへどひとめあくびてかせよ。あくばは
しもあくべや、かのと

め次よたゞのまがまへをひこねりて國へ、風ふうびへよアス

人祖未通女兒居守山邊木朝朝通公不來哀
ひのわやのとくめこもあくわゆるやまぐらあきよかよしき
うくねばかちも

上ハ序ニシテキ十三をきの語字止と注ア字止トヨアリト向
カモ神甫備山とリテ、其事は此山也トモナムトテ、先モ字の
本名時ノルニ不名體本内田良友考古書便置者

開木代来背若子欲云余相狹丸吾欲云開木代来背
やきうのくせのわくこづほとよりをあまやうわとほとつ
やきうのくせ

ウスと開木代來背のくせに訓歌來背のくせに
男と女あまきこをハ指揮のをすよ愛がるのをも相佐和にし
とよりをもとよ書へくは、此あみがあはづくと歌一とつと
カミマミ

右十二首柿本朝臣人麻呂之歌集出

嵐前多未足道平人莫通在乍毛公之来曲道為
をのさうめたみくろみちといとよかよひそありつてキスケギキよ
さんよキスミよせん

木みるを次名あらうとままへ行きむ様もとすと集まうえき、詞うく

玉垂小簾之寸鷄吉仁入通來根足乳根之毋我問者風跡
將申

たまざれのをものだけまよいがくひくねたらちねのぞくつとり
ばかせとまとせん

まれの松の、もとを延びすけきとらどもふと向うをぞ

内日左須宮道爾相之人妻始玉緒之念亂而宿夜四曾多
寸

うちじよふやざれあひて、ひづまのあよたまのよのゆひされ
てぬるよごおやき

始字ノ
義追加

うちひきをまくす。字道へ教のせきとし、たぬく筆あくよそとす。
始は字もよ、遇也、陰陽相遇也。ゆきともじよもづきよす。故の傳え、さく
筆やく人づきゆきよす。至るまくはまく用ひくとくにば、社かあくしの考
へて、まの教のめくとりよとあくす。

真牛鏡見之賀登念妹相可聞玉繙之絶有戀シ繁此者
まちがどみうづとまちい。子ひあるのよたまのものたまくよこしの。
」
「空きこのころ

まくはり、かのとみ、やくじ、アーチーとモルヒナヒル
トシタヌカヘテ、ハリヒルモルヒル。

海原之路爾乘哉五口憲居大舟之由多爾將有人兒由惠爾
うもづのみちのわやわづひもくそれりづるのゆ、よあるうえ

五經十一上

右五首古歌集中出

正達心緯
母乳根乃母之手放如是許無為便事者未為國
たゞちわのうづかれてかくたとのよもじへまくせぢくふ

徳のよひを教く相

人所寐。味宿不寐。早敷八四。公目尚欲嘆。
ひとめぬるうまいにねどて、ちよともやまきみづめとほりうなげく

心もあひとくぬるもぐくの間るとすきよて、まへ事すあひ事すて
人所へ放くまよし夢すへ室す所寐へやう門てへ所のまゆりくまよしよまく

或本歌云公矣思爾曉來鴨

戀死戀死耶玉梓路行人事告兼

心もあひとくぬるもぐくの間とすきよて、まへ事すあひ事すて
かやこの枕詞、道りへよをすよこもづやせよ、かくよはむえま十五
三十六古那毛之株等也ほくすくとよりつ事にヨリササハ人のみ
告てぬとあれハ無ハ無のほくと、信ちこくとアキラキと室モシテ

心千遍雖念人不云吾口戀嬪見依鴨

心もあひとくぬるもぐくの間とすきよて、まへ事すあひ事すて
上ニカヘキモサトナリ、人よのをそへ、ヨリモキモトリ

是量戀物知者遠可見有物

かくほくわくもくひかのく、とくませぐくぐくみるぐく、あわきるくのと
何時不戀時雖不有夕方枉戀無色生の腰もてつらむ
づくし、ひぬとまと、あくねくゆくもくけて、ひくもくち
えくまくハズベシひてこ、之ハ萬のほきん次下ヨ源流の下ゆきれ
無事ト一ト無事トあれバト必ほれくへ、扱ハ借字の、借字ハ清渴
ふかくもくとく、半十三月何時橋物不至付等若不有支、この月
とく
是耳、憲度玉切不知命歲經營

かくのみ、こくやくとんたまき、のちくとくとくとへトフ
トクーのトハ脚解、五きくまくとくとも、ヘトハ経とのこと、四の句う
音、やくとくとく

吾以後所生人如我憲為道相與勿湯目

吾は後所生人をキミ君に木此
われゆのちうまわんいとハツヅコトモシムアシヒコモチサウメ
興ハシの後ヘ此辯はキムタニ
如千歳有不興鴨あく夢所見興
同くほへ向きもくと差みアヌ
社まゝカキヌキあるハ妹ニ告
乞きうきとしのうてく初ノこのことハコロヌ同く御
さの辯のちうまゝハ異ヘばまゝ候と有起名湯同と云ふ同
レハ多々アキテスヌアリキナリトシモルヘ

健男現心吾無夜晝不云寤度

神代紀顯國王の顯とうつて
何為命継吾妹不戀前死物
たゞやくいのちつきよこのごもさきよもなまきものと

一
五
編
二
上

吉惠君不來座公何為小厭吾憲乍居
よりやまきよみとだふせんよどもこれ、そひてをつへ
哉のトヨタの妙解ハ多ヨミづく事、されど、少い併モちあれ、黒々之の
次の早教哉、

早敷哉誰墮鴨玉梓路見遺公不來座
はやくわづかのふれのむなまがこのみちくわづれてうみのきやうくわ

ちやう一ノトのふたり、されどへまればうの、とゆきり、衆人の傍で、

止まぬる又改とちく耳まぬれと公のうへ渡り一聲のこと

公目見欲是ニ夜千歳如吾憲哉

キみぬをみよくほりてこのよよちさせのことをわづかるか

打日刺宮道人雖滿行五忌公正一人

うちひすみやぢとひとみらゆけどわがまよまみばだひよそのみ
みやちハよよ出ち海徒よ人のまよどり正ハ唯

世中常如雖念半手不忘猶憲在

あたきのばづねがくのひとおもへどもたちわもられずやまやこじふす
をこえりするにせんかがとひそひめりてとくとそれと程あるす
ひうて、又傳はれども、年年の辛ハ多のすすむ「かほり」、辛
言の下みをく、たとめゆ、年、夢入する事多、かるまわす例あれ、年年
きとぞくいぞれす、今後字もくし、一字の二字もうちわちりのだくの考

至、在ハケムトドキシテ

我勢古波幸座遍來我告來人來鴨

わ、せこ、せこ、く、い、ますと、か、ち、ま、く、わ、れ、よ、つ、げ、く、ん、ひ、と、の、く、ね、う、る
立、坐、遍、來、ハ、う、き、す、漫、く、ま、く、く、し、適、喪、と、き、く、う、た、ち、く、た、前、べ、一、こ、ぬ、る

ハ、不、來、鴨、と、く、び、う、と、不、と、思、き、う、例、集、事、す、ま、す、す、室、モ、殿、す、い、す、

そ、ハ、之、の、様、な、く、と、卑、す、う、か、く、

鹿玉五年雖經吾憲跡無憲不止恠

あらたまの、つとせすれ、と、わ、づ、く、る、ち、く、ち、ま、う、し、の、や、ま、す、あ、や、る
ち、く、ち、ま、う、し、ハ、ひ、ま、く、く、よ、申、形、路、の、そ、く、ろ、く、路、く、一、つ、が、ち、く、
き、ま、う、し、一、度、玉、云、五、ハ、上、の、玉、う、う、て、憲、て、へ、る、う、シ、ハ、あ、れ、ぞ、る、う、ん、と、つ、す、

石尚行應通建男憲云事後悔在

い、ふ、す、う、ゆ、き、と、わ、べき、ま、す、う、と、す、と、く、と、く、の、も、く、い、よ、う、

位低

日位人可知。今日如千歲有興鴨

巻と押さむままでござりの健男よりて、建ハ健と有きうちもえ
日位人可知。今日如千歳有興鴨
ひづれあがひとちやめべけのひのちくせのこゝもあかさせぬのも
位拾種をみ低玉化とよと見て、日を多く却て人月をさすのトヨまで、
しらの日ハ多る事のみくちくあれうとわよよちくべー位ハ多の送ふく、
ひまくべてちくんうもあつくれつれど、ちくべーちくべーちくべー、この鳴てえ
のほよく、ききものと不のまわうえはま不と黒まくまくまく、こまく

立座態不知。雖念妹不告。間使不來。

あはばはをもくおもむくと、向使ハ室のやのそと、改ま
鳥玉是夜莫明朱引朝行公待苦
ぬもくまのくのよもあけすあづしきくあくゆききみとまくごくも
ゆもくありあづしく、背に身よ別れてハ、又あると後方のくもくも
憲為死為牧有者我身千遍死反

ハシモトヨシカツアキセバハリスルトヨウラヒテ
タマヤセニヤ即ハナリテアキタクスルアキモトセバ
タマミタリトヨウラヒテアキモトセバ

玉響。昨夕見物。今朝可憐物。
たまゆづみ。うのすけづくものと。うのあやま。うきもの。

玉ゆゑ、紀ニ手玉玲瓏と、たゞやく、瓊響玲瓈と、をぬきしゆゑとす
汝をあまゆす、もよおどるか、ゆゑのひらと、みとみり、ゆゑは、うるさむ

のあたかでゆるきくまくとまくのあたかくとまく
うくはく、まくまくのあたかくとまく

中中不見有後相見戀心益念

玉桙道不行為有者惻隱此有憇不相
たまやうのうちゆのよしてあらませ、わがころがる。といふとあはれ
道行ゆきゆくよそもきてこゝも
朝影吾身成玉垣入風所見去子故
あきかげよわづみがわづみのほのふとくすこゆあふ

入八靖

五解十一上

東十二朝歌
身を成奴玉情
所見而禮之歴故余と全角、されば
頃は時の邊へひろの邊よりすくましと
さへもうとく、かかは衰えておるよつてを
きりとせんのちぎまほのまつたてと
をうと又せよほのちぎまほのまとまべくとすと
行文の
行行不相妹故久方天露霜沾在哉
ゆげどくあちぬいひのむじよかのあみのつゆドガふぬれよけうも
逐くとゆげどくとおまゝ蝶もるものとのとえ
玉坂吾見人何有依ス亦一目見
たまきこのふわうみしとといのまくしよーとわらうてのまくしめえし
たまきのねまくとくとく、すいよ
暫不見戀吾妹日日來事鑿
まくとくとくのまづく

年切及世定時公依事繁

たまきのよやうでもありて、たのうもきみふよりて、この土代と
年ハ五の隠え、とうとあゆう、なまうる縁、おほきよりありとどひま
て、ちゆをもとつて、まくわーの解

朱引秦不經雖寐心異我不念

あつひくはすれど、ねねて、ころとけよ、わざばちくふ
あつ川花、二のうはまく、膚とあ筋へけふらまがり、もとと
伊田何極太甚利心及失念戀故

ひづふねじころくの、ころとけよ、わざばちくふ
そへりむとせんとごくハ利きひのぬく匂ヒテ、極太甚ハ此事
大好すまかうて、まくはー極太甚一年もあらば、いふて、ねじころと

恋死、恋死哉我妹、吾家門過行
こひますばぞひて、まかどやうぎよ、わざべのかどともきてゆくらん
妹當遠見者、恠、吾戀相依無

いものあふとわくしれ、あらすよ、これをもとあすよ、ときのみ
まよまよ、もくして、めうるのあくと遠くそて、あくまきさく
立くとせり

玉久世清河原、身後為齋命、妹爲

たまくせのすまきからくふくとすて、ひくいのちも、いのためこう
わ名村山城久世郡久世つゝゆれば、もくせといふ川の名も、ゆくるるま
まよいのれとまき二あつひのとて、ゆざめこそとて、ゆくるる

玉、山の漢と代り、情ハ能のまゝ、さうやまうのくせの、つゝ小
前へーとなりました。されど、こハ能のまとは、さきからあるあくまで、考へ
思依見依物有。一日間、忘念
れずす。さうする間の、あるかのと、ひとひづれを、わらひもとも

思依見依物有一日間忘念
れすアリムよろみハあるのとひとひでうをわむるともし
勢けハ人の名よりわりせむひをも色とうえひしもあ
ハラカヒハセテモシエトドクアビツクシテモア
シホセテヘ

垣盧鳴人雖云。柏錦紐解開。公無
がきゆある。しだとせど。こまつまき。ひととあく。
垣秀ホシ如ハシメ。かげまとよまとも。もつよまとも。もるハセナ。いま。紐解めてお
けり。あらわものと、くはまく。くよし。くよし。
柏錦紐解開。夕戸。不知有命。戀有

卷之二

方解十一上

こまよき。いとさあげく。ゆふべづふ。ちくもるいのち。こうひつこのあく。
古川戸とどりと川れど、きの川べづくら、谷のまちはよもぐ、けむらはなじつ
あくや、のまえ室もまつせ二五と匂とひまつてつむべとむす
百積船潜納ハ占刺母錐問其名不謂

えりのなかつす。やうやくは、とよし。ものよはの。
百さうハ百尺、やうハ十量フハヤリト、すらも様ハ信守スル。仁徳紀ふ那耳波壁
苦須儒赴近トコトラマ苦羅齋許コニチヤヅミ許言那豆殊ナダシタシト、多く、多くの船ボウを、渡ハシ下
ちく船と附ハシメテ漁ウニ入ス。その浦ハシマと古よじ、うきる序ハシマハ、流ハシマ
多くの占ハシマ前ハシマれとハシマ、船ボウの内ハシマく、し、人ハシマくのとハシマ、
人ハシマせとハシマ、アーモドハシマト、ト、
おまかせとハシマ、アーモドハシマト、ト、
おまかせとハシマ、アーモドハシマト、ト、

眉根削。鼻鳴紐解。待哉。何時見。念五君。

まのねかきをあひ、せとけ。またわやもうすらんとおりるやさ。

男の時許りて嫁よ對してりるへ、よよ嫁が待へさまをつひ下は我らといふ、
まふよ六月にてつまうと妻へ、若ととえ方極こそがモテと傳はれり

君憲浦經居悔我裏紐結奉侍

きみよこひくすれをれば、ぐやくくわのまくじをゆきていた、ア
侍の倦のほちく、ゆきてたゆーと別べ、ま十二キ、わざじとのとの侍す
懈もどきて、たゆーと前く、悔い憤のほちく、あやくくわくまく
璞之年者竟杼敷白之袖易字少忘而念哉

あしたまの、まつれ、おちいたへの、そでえこと、わされてゆりくや
白の下布、妙のすほく、あしん、袖易ひよと交ひ付、袖もさげて交わる、
あひづく、袖をうて、いとうく、戻れて、ちくやハ、改めてもうくもそれ
やうりく、サとゆ辞のすほく、辛のほちくべーまで、もしも

白細布袖小端見柄如是有憲吾為鴨

きみよの、までもほの、みもくうがるましを、われのまくこの

キ早まく、小説ももくと可也

我妹憲無之夢見吾雖念不所寐

わざや、ふ、としもべまう、いよみくとあれひせうど、ねうえもくふ

えひ為のまのほもよべ、ま十三き嫁えは多喜、便名鴨、ま十七や、やこ古

非次弊を賀利トミ 入出由金奉書音書

故無吾裏紐令解人莫知及正逢

ゆゑりちく、わづき、じよど、じよじよとすゆみ、た、よあつまく、
ちうくれば、がくまよ下はのくらみ、古まよきまく、金づく

まと、人よきるるも

戀事意追不得出行者山川不知來

うるうくちくまかねて、いりゆげやまし、かたをくすり、めくづみけを
追へ進のまのほもとへトヤアモテ、山川をみへんもれアモツモ

寄物陳思

之ヲ辛ニ
謀

處女等之袖振山水垣久時由念來吾等者

をとめど、ぞとてすやまみづうさのひよきとくよ。といこゝこれハ
之レ本辛とミリ送ふ事に人するのくく院すがり、草ハ布あふのつ
せり古ナサナラ傳れ、バーレン序ふりつの

午早振神持在命誰為長欲為

ちややざるかみのたけても、のちとし、たれづくめふう、なごくほわせん
神のすすみ、神のいたずらすすめり、室もく持ハ禱のほそてかくよ
いのれちくへり

石上振神杉神成戀我更為鴨

室あえよのかみがくすかみくして、こひそしやれ、せうくふむるのし
み財

いづ、まきとるて神耳とくらき、まくろとおの井お神方御てまく、
えくまくあいすりうらまく

何名負神幣嚮奉者五念妹夢谷見

いづばのすがふぢかみよたむげせ、わのねくじもと、いのすぐれみむ
名負神、ハづみ神をもるすあいぞんちく、一もくらるるう神と
つまくとあらむれ、室もく名づ在の後、豆に豆の傳ふく、いづまく
あいみよぬくたむげ、ハづみくじア

天地言名絶有汝吾相事止

あきらむと、よそのたえて、あいぶと、いまとこれと、あくことやま

アサのあくしかざうをとくはとすらよ伊麻思アシマシとあり

月見國同山陽愛妹隔有鴨

つきみればくふおおきやまくちかういとがへかづかたるのも

キハ月らればれまく久名をやまくさきみがあくとへくとく

トミミ向、レハモモトアマモリハヘムも

修路者石踏山無鴨吾待公馬爪盡

くもちいももやまのかくがむわのよきみううまつまづく

和名ガ参車ハナカニ絡ル取也トあれバホモリすはてうるまへるん便

ナス

石根踏重成山雖不有不相日數戀度鴨

いたねゆくイタハやまくあくねぐあくぬひまねこひわくのし

路後深津島山暫君目不見若有

みちのやまとつ土ヒまやまきくクきみづめみねハくもカりけ

傳紀養老五年分備後国安那郡置深津郡アシマシ景行紀日本武

安川尊到吉備以渡穴海アシマシこれ穴海アシマシ安那郡アシマシハ傳後

え下り天城アシマシとくはみの後通の石シのこす、ヒハキカリ

序の

紐鏡能登香山誰故君來座在紐不開寐

じくかみのどうのやまたうゆゑどきみさませふひとあげよわん

御うごく松河、乃とのひづきのむべ、後の裏の紐アシマシと舞く舞

ハ掌アシマシと舞ふ手て、解アシマシと舞ふあよ、莫解アシマシと舞ふべと、言アシマシと舞ふせと

放アシマシのひづきのむべ、竹を解アシマシと舞ふあよ、浦アシマシがれをやう

人のまわるよ衣の紐解アシマシてねんやうと

山科強田山馬雖在步吾來汝念不得

やまちあこらのやまとうまあれとかくすわづくがとひうね

和名抄山城守治郡山科を及せこらのふるもあれどかくすわづく

ちと算りばかりてあたるハ初どくからげしよるのちとす

ゆゑはるはるそくれどこらのひとからづくをとゆく

遠山霞被益遐妹目不見吾憇

こほやまかじみたむびといやよ、ゆづみせす、わがつみくも

とハまほすのまくもりとそくの

是川瀬瀬敷浪布布妹心乘在鴨

このかきのせとのまくもみもくもいつのまくものすみけるうも

はせうとほてどもよへどもよもせぬまくもせり、せり、せりとよしほく

次々字経波とあればかのまことと是とくきよよりく、見川八名うち

丹と河をくと東海筋の波もあれどくがくを多くは二段のゆいく
よもやうの後の御深とへ連う、あればづこすあれ、やまとよしとての
門もつまわく一まへま十ままれますす御のとゆきゆきのと
よもやうも

千早人守治度速瀬不相有後我嬢

ちとひとうのわよのをもせよあらずあらぐのちとわつま
ちとく荷、速きはりて別をやまくすまく、集中の一つ
例へちとくとへまくとくとく

早敷哉不相子故役是川瀬裳襴潤

はまやあらぬ、ゆきづくのをのせよそのもとぬれぬ
あらぬよかよあらぬよあるまのとくはるあらんとくにゆきぬありて、
是川もくくふきといす

是川水阿和逆纏行水事不反思始為

こののののみことのまくゆくみつのことばかり。もひきゆれ、

水のうわの乃門のぬをもれ、美空わへ等々し、達事流す乃門のゆ。

「いじりひきもくもせられば、うるさくもくもく、りむはうとく車の

きふよ、及ハ妻のほく、うかぐり、あくらの

鴨川後瀬靜後相妹者我雖不今

かすがちの、らせつけくのちもあんいもふづれよ、しまのくじとし
山城の野のすう、作て野と、おきなれ、定めづ、後瀬の下は
漱とり川後とすよ、とほと、いそんすとく、そくつれのむす
ちととく、波よ都よあくと、ひくと、また一海よ、もだや、
もむかの度すありて、今り、とくとく

言出云忌忌山川之當都心塞耐在

水上如數書五呑命妹相愛日鶴鳴

みづくへよかどく、とすわ、のち、ゆふありと、うきじつむかも
物の教とあよきよ、かく、うきかく、清りと、なれきしむく、
枚と、一二三の教と、は、涅槃經は是身無常、と、如畫水、隨書
隨合と、ゆきと、ゆきて、とある、うきく、うきび、紀年祈と門と

荒磯越外往波乃外心吾者不思戀而死歟

あううこえ、うゆくなみのや、の、こう、これ、れ、れ、れ、もして、と、ぬと、
此より儲溝方ニヨミケヤト、うちのゆく、あーん、ハヌムト、と、と

淡海海奥白浪、雖不知妹所云、七日越來

あつみのあつおまくわがまくわいとすりぬのこゑさん
とハキタカシトシテ席ふるのあはまくわく、嫁許とそぞり算もんあひ
をト遊も、あまきとえまくよちる一トモハちる、トモヤモヒコトモ、
七八日多きとリありて、室を多く或人役よ、七八日、直の轟え、いまだ居てといへ
た。ふくまきぬといふ

大舶杳取海搘下何有人物不念有

おうねのかくよみうみこいのうとおう
スルの船、下総の秀取の島へあれど、幸せにつゝみの舟の上へもる船
の秀取の浦ゆこま、半はまよとまはまはまのつりて、あれは近江の
半はまよとまはまのつりて、半はまよとまはまのつりて、和名
抄四聲字苑え、海中以石駆舟曰碇加利、伊半はまよとまはまのつりて、和名
奥諱隱障浪五百重浪千重敷敷戀度鴨

奥ナリハ海ナリトヨリヨリノ、又の事と奥ナリトヨリアレバモトアメ

テモアム人主の聖氣ナリマサカツチトソモミー

近江海奥榜舟重下藏公之事待吾序

あづみの水をさくすにいづもおうづうくわてきよが、こゝかづこれぞ
重の下石の水とすとあせり、やく序りて、蔽ひうると別て、いは廢寺、かく。
君とハヨビテちとりとそきより船ハシムとぞとゆくとすとゆくへ
と翁はれき、宮もえかれてと、浦瀬れ居く、風と候とし、モたと
のくく、すのきよきよひかくとひき、はいすむうへ序はあく、
といふ、船考へ、榜を半傍とせるハ是也

隱沼從裏戀者無之妹名告忌物矣

こゝの水のさくすにいづれハモヘキアリ。いもものうつ、いじへきものと
えひ為の浮うべ、古より記許母理豆能志多用波閑都、シカアレバ、

大土採雖盡世中盡不得物戀在

おやつちもこればこれどよのちうふ。つきせぬものハシムとあづけま
大土ハナムとひ

隱處澤泉在石根通念吾戀者

こゝの水のさくすにいづれハモヘキアリ。いもものうつ、いじへきものと
こゝづハトヨリテモカクコカツ申く處へヤヒト別とす、海をくばふ事ひ
シテ、大よりも古よりのこゝづの事と云ふてといふ船舟、シテ船舟あ
らむ、さて津泉ハ地あるもで、津のとひ、こゝづの石根より流れ

あはあ～、アセのまゝを因るよ
あはあ～、アセのまゝを因るよ

白檀石邊山常石有命哉憇尔居

土の山のゆきがいと、のゆかひと、かひつをせらむ
えまゆにねは、上はとや、とくとくの、命うれや、心あきらめやのを
へんがつよ、とくとくの、命うれや、心あきらめやのを
夫けおもへば、おほきにとよみあらわば、とくとくの、命うれや、心あきらめやのを

誤今ヲ今ニ

淡海海沈白玉不知後憲者今益

万解十一上 サ一

誤

白玉纏持後今吾玉為知時谷

此志の如きあらわす。まことに、せんじれむ。かたふ
來ハ志のねじりあらはす。ふ、吾めとひし、りくとも、今テ一とせ令子高れど
白玉後手纏、不忘念、何畢

よまとてふまきへよるわがよしにひつゆや。むへ
をいたとゆくはよきよみゆふ、空きも、念の下心かうとせし、畢、異の
ほく、ねようろへいつのかたへとくへとくへ

烏玉間開乍貫繒縛依後相物
うちたまとあいだあけつぬくもをとすやよきれびのうちあさひを

鳥の白のまの裏まで一めどりもよき、又は輝考よき一とへ遡る

香山雨雲位
朽曳於保保思久相見子等辛後急牟鴨
かくやまふくわあたもひすもりーあひみーこまうとのむらこいん

行ハ棚の邊の、上ハねぐらへくじ、下ハ席のまわりへくはまつてうぐえ

雲間從狹經月乃敢保保思久相見子等守見因鴨

天雲依相遠雖不相異手枕吾纏哉
あまぐのよもあひとみあいもどもあまくちまくちわれいまのめや

雲谷灼發意追見乍為及直相

我故所云妹。高山之岑。朝霞努過。燕鴨

旅館へ入りました。夕暮れの頃、少し雨が降りました。宿の前には、高さ約一メートルの岩があり、その上に、大きな木の根が、岩を抱き、根元から水が湧いていました。岩の下には、小さな池があり、その中に、多くの魚が泳いでいました。宿の主人は、この魚を捕まえて、お土産としてくれました。

のうよハ、この御事どうぞ、御心かうせん。

鳥王黒鳩レ
ぬきまのくろのうやまのやまもヒエニキアリモ、
玉髄ヒタセナキナフ、ノホリモリヨトキテ、山羊ヒヤマヌヒ
ミの筋ヒテモニシテ、小角の筋ヒテモニシテ、まれ
むクルハナギヌクルヘと、添ひヒテモテ、義ヒイヤムダニ
トメテ、

大野小雨被敷木本時依來我念人

下解

遠妹振仰見。偲是月面。雲勿棚引。

とがつまみうちさけみつ。あめすくみまのねおにじく。なたまびき。
深キゆうきよ。月のつやのこまむくわすり。とひづ

山葉追出月。端端妹見鶴及憲。

やまのつよや。いつ。つものあくよ。ひとぞみつるこし。きまてす
山のそへ山との鳩。じゆく。やまのゆうと川。はまも。よハまく。
いそん序の。空も。追ハ照の溪。と。とひづ。次の。うと。今ヤアム。
及ハ後の。月。のち。こしんす。と。まおき。と。と。後。立年野。く。
いづ。そ。ゆくべー。

我妹吾矣念者。真鏡照出月影所見來。
わきい。つ。月。と。わ。と。ま。か。み。と。う。づ。つ。の。か。げ。と。え。こ。ね。

久方天光月隱去。何名副妹偲。

い。か。の。あ。ま。て。も。つ。か。と。い。ぬ。な。か。う。ま。く。へ。り。よ。と。ち。ぬ。ぐ。ん
月。と。映。が。る。ま。う。ぐ。へ。る。ぐ。

若月清不見雲隱見欲。宇多年比日。

み。う。き。の。そ。や。よ。み。ま。く。く。が。く。み。よ。く。ぞ。ほ。き。こ。う
ゆ。ま。き。す。う。よ。づ。く。あ。そ。ふ。そ。ま。く。ほ。ま。あ。ま。く。と。こ。う。月。の。そ。や。ふ
も。も。く。と。く。る。ほ。れ。よ。う。た。よ。う。そ。の。ま。う。と。く。ま。う。と。り。つ
く。く。改。よ。う。そ。う。う。と。は。ほ。ま。く。と。り。つ

我背兒爾。吾戀居者。吾屋戶之草佐倍思浦乾來。

わ。せ。こ。ふ。わ。が。こ。い。を。れ。ば。が。や。と。の。く。と。へ。れ。キ。い。う。が。れ。ふ。く。つ

わきあひはははるわすめとまくおうむへを三まよのそな
くよせのひあをきてわざそられ、あのそな

朝茅原小野印空事何在云公待

あさちのとぬまゆよこことと、いのちわといしてきこみとばかりしん
かまくされど、そとめあるまゆまゆとみてね、いとく序
うて、人にはいるをもとにしてうとがとよへ、三十三あひ三の
ゆうゆう月をとくよつじくもるこれとひつおれ、まよあらち
ほかうだりてててててててててててててててててててててて

路邊草深百合之後云妹命我知

みちのくみゆのゆの、じふぢゆの、のちを、われはちくらや
まはよまよまきよえひりゆの、うとうと、まほにやうすれはこうく
ゆうゆう、はまゆりきこうあひのほつの、あひたゆいれは、ま十八

山外
ゆうとひまゆの、うとひを後とすの、うとひ、後とゆうとひか
とひ、もひもひよといつあはゆ、はまゆの、うとひ、それれど、うとひ、
ねうとひ、はのとよそれば、うとひの、うとひ、うとひ、うとひ、
うとひの、うとひ、うとひ、うとひ、うとひ、うとひ、うとひ、

潮葦交在草知草人皆知吾裏念

みちのくあよましれ、くみの、うとひ、うとひ、うとひ
潮ハ湖のほく、集草みまと、うとひ、うとひ、和名抄、和名抄、鷺、蘆、刺、三、成、云

さうとひ、もととひ、うとひ、うとひ、うとひ、うとひ、うとひ、

山萬首白露重浦經心深苦戀不止

やまちのうとひの、うとひ、うとひ、うとひ、うとひ、

ひまくは改むる、ひちきの村は三毛のあつたとおもへり、
ふとれど、もとより、さういふのゆゑに、むちの止よ

予謂之心深。但不知其一也。蓋其子之

潮接延子管不竊隱公憲乍有不勝鴨

みよとよ。やひよこもけ。まのぞやく。さよひつて。あらかくぬの。

のまゝよきつがせぐのまひねもあよまめりて、タゞめん心のばす
取れて、まゝうきふをやうくまひねじゆうてまれ、せうとよちくんとおハ
いをれま、されど根もくと、室もハ枝ハ根の隠、昔の下の不ハシの隠
うす、ねり

山代泉小管儿浪妹心吾不念
やましろの、くわんじょ、なみめのこころは、むかひ

万解十二七
廿六

和名抄山脈相承郡水泉以通
美、日本之水也。相之

のよきのせに、
かくはうむすめ
のよきのせに、
かくはうむすめ

一云三諸山之石小管

管根。惻隱君。結為我紐緒。解人。不有

山菅亂戀耳。今爲乍不相妹鴨。年經乍
やます。づのぞ。ハモヒのこ。せめつ。あぬも。うも。とく。つて

山東川子の事

我屋戶。莞子太草。雖生。憇忘草。見未生。

わやどりきの生れとくさ。おひわせをうながす
おと音も朝の音くもとよより、いそむくとき
をねうきゆうめのくちあはせ草年こねくすも、
おひて、いそひて、まほのわくわくとされど、わくわくぬと、
まほとひきくも、葵けんかくこまほすとて、和名村の正衣慶遊ホと
いふ人とひきすがりとせり、ぬまよ正衣慶遊ホとくふといふ件たす
されど、正衣慶遊ホとよすきのうかとせり、ばくもだといふと及ぶ
すとしのくわくすべ、うちあだりとくよくなむかくてもう

打田。犁數多。雖有。擇為我。夜一人宿。

方解十一上 サ七

ま年二年水とあればあけよむすびひえとまくえり
めよとまく陣、うたふべ、御ハ萬々支れと、共々極れ、傍シこまく歌ふ
えり持てまく、トおほよ日才御ハ多キ、いづく、持てまく持てまく
あひ、ト、お持て御ねと、まく歌も、ト、されど、萬々のちも、
まく、又萬々のす、いき、お聞てまくと、まくいふ、ま年、二のうと、後傳、ト、

是列名負山管押伏公結不相有哉

のよ。よやかみて、せめて、よみ、もと、あはれ、と、
それいかと、よりじめと、よろしく、ヨリのよよこり、ア、よ、と、よがう、
彼ともと押伏せ、人ちやまく、あら、うきうきのままで、遙りんと、
あく、あく、うきうきやとよと、おと、おと、それき、室もんを、おとへかう。

秋柏潤和川邊細竹目人不顏面公無勝

あきがへるやのちのものひとよせあべきみよたくちく
あきすハ橘、しむけりハキまつせそつを畿内よどー、山東アリ、朝鮮
國ハ川べの生れのめちうじてめれらゆみえくわとく、さくののハ、小竹ハ
志まよれもれ、ハキアリ、タ、それのゆきく、小竹叢ニ、まはとのものえ
きくく、人よきへりて、さく人めとおぶかよらるよ遠ざくして、やす
せきよとく

接葛後相夢耳、夢日度年經乍

さねりのちもあくと、いのこと、うなじわづか、とへよつ
まきすハ橘、うなじハ所モ、せうすい、三すよよとく、うなじ、
さとく、うなじ、うなじ、うなじ、うなじ、うなじ、うなじ、
まきすく、うなじ、うなじ、うなじ、うなじ、うなじ、うなじ、

路邊壹師花灼然人皆知我戀嬪

みちのくの、いのくの、まるの、モト、うなじ、もと、うなじ、うなじ、
毫ヒ大原の、布紫原、ヒ、毫ヒ道邊の、立紫原、ヨモクハ、櫻、ヨモク、それ、ヨモクハ、
を、それ、ヨモク、ハ、櫻、の、新、ヨモク、花、ヨモク、ヨモク、ヨモク、ヨモク、ヨモク、

椎畠紀蓬草丘、伊致病姑云、蓬草此云、伊致病姑云、

或本歌云、灼然人知爾家里、繼而之念者

大野跡状不知印結有不御五春

おののうよたゞま、おもゆして、あつて、おまえ考で、よひも、うとい、おののうよ
ふよあきらを、おもゆて、あくやうひて、おうかうおれ、おもゆて、おののうよ
き、バヌヌヌヌヌ、あくやうひて、おうかうおれ、おもゆて、おののうよ

さんと、おもゆて、おののうよ、おののうよ、おののうよ、おののうよ、おののうよ、

の事多くあつたがつてかくはと訓んじて、かくとて極え

水底生玉藻打靡心依憇此日

みちうてねづたまめのうちひきころとよせす。こよまのころ
とハキシキトムシイクニテ、小座ハラヨロトヨマリ、吹ハビの邊
敷拂之衣手離而玉藻成靡可宿澑和守待難雨
幸子したのころすでかれくわまむまを。じさめくわとあやうと、
きうての背、おもうれて、我社と離れてとよそこめづれとおとく
即のくもうじきよそとくへ

君不来者形見爲等我二人植松木君幸待出年

きみともがくみよせんとわづらうまきみとまちでね
女のうへ我スハシモトテヘニ年ハ年の後シ室キハアモレシね、若
子ノのとくまうせんとハキシのうふをとせくとくへ

袖振可見限五呂雖有其松枝隱在
さくづまくみゆきかざるあれ、そのまつがまよ、かくれたとけり
男のうぐいすもすみゆきゆうとよ、すねむはよのうよつねとく
珍海濱邊小松根深吾憇度人子始
ちぬのうみちよのこまうなづめて、けづりしわよしのこゆあく
ちくわゑ、おぬくとくのいのこよまくまうとく始の
すきへ

或本歌云血沼之海之鹽干能小松根母已呂爾憇屋度
人兒故爾

平山子松末有廉叙波我思妹不相止者
かくやまえこまうがうれのれもぞハガサマヨアツヤアツヤミチ

まのうの者、骨の浮くべし、おれのうへとすれむぞりいひやう
生れんやハ、辛ニ海老のねすよかてゆきとてくらべ、守礼年若れうよ、
まろしげれびとよもよく、ばんわくらうとくとく、いのそくよ、あ

儀上立回杳澁心哀何深目念始

いのうへよたぢよし、まのまつておじきめん
此のうじろのあそび、まくわする。——朝瀬の天木秀^{ヒロノキ}
“まくわする”は瀬のじろのあとよしむらうえをあく、せなまくわする
むろの木のまくわするは瀬のまくわする、天木秀樹^{ヒロキ}さんば
回香樹^{カクシキ}ともかくまくわする、もくわするまくわするの木のまくわする
まくわするはとあるやく、其のまくわするもとある
よ、あやかしむ、まくわするまくわするのまくわする

橘本我立下枝取成哉君問子等

成ハ本の主の御事より多大の功と目して、又ハ主を尊むる事無く、
主は人達より多く、その内に主は最も多く、主は最も多く、

天雲爾、翼打附而飛鶴乃多頭多頭思鴨君不座者
あまぐりよもねもうけてよごごのたづくつらきみまきぬだ
よひたづくといもんをのこたづくはたどりくとくとくとく

妹憇不寐朝明男為鳥徒是此度妹使

此へ飛ひまつゝに、こゝへもとよ

念餘者丹穗鳥足沾來人見鴨
印之又印之又印之

おうすあよきのほかほどのあめくとしとみえの
門とかちやくしておきものと庵くにア、ちあとあるとのひす
をえみりきのまづまじうと人アシカヒトヨウキ室モミキナ十四安奈由
アサヒ

高山岑行。空友衆袖。不振束。忘念勿

やがてのあわゆくもとよりとおひよしをうかがひてから
とい友ともぢみとくらへば、くらの風ふねはあれど、神上
らきりと、これぞ一物とす。實じきちやうへは、支度もとくま
づくは、むちもぐれとくま

天船真櫓繁枝榜間極大戀年在如何

いりてゐまでもぬきこくはしわくとひふあらうつる
本へたとよあくで、油の様子もあくまで、ゆうすく
ゆくよかくとまへほもも一重のやうが、うよもくとくばをと
て、う極大甚とゆううくゆううく

呂常母、養子眉隱、隱在妹見依鴨
たらちねのはのかよこの土ぬ、うりうらすとみんよともが
ウミハ和名サ蠶和名加比古一
訓古加比良、虫吐絲也、說文云靈和名
五由、蠶衣也、毛十二三寸
令向トキコノトウシテハシカレルトツクニテノモ、足常ハ多ヒモモリテ信れ

うよひとあひたひうみゆふそみゆのうめ、そくはわれどもれや
うまびとひまくく神代紀結髮為髻うどきと生えがわのむへ留
と歎きく傳うみゆりもく壁の象りく皆ちもくし又古川二二

ひくゑの心、蛇の舌、もゑくやぢく、玉くらへ歌ふ
かよ、てましをべ、かくは、とくゆの、うめやへおとせんは堂

一云所亡心目八方
ワヌラエ

吾君，
早人名鳳夜音灼然五口名謂鸞時
誤

はやいとのちにわよごを、かくまくまくのりせつまことのまく
神代紀一云狗人情哀之、奇還出涸墳則潮自息也是又知等有神德遂以
伏事其穿是以大跡荷命苗裔諸隼人等至今不離天子宮牆之傍代詣狗奉
事者也、テ大嘗會式ニ年人司率隼人今立左右朝集堂前待開門
乃發声ヨクハ大吹聲ヒラシとたつるゝえ、あれと名す御歌ミコトウカとゆア、さといち
ところといそく序シキとせり、空アツム吾ハ君の怪ミタマといひてよき
剣刀、諸刃利足踏死死公依

卷之二

我妹戀度劍刀名惜念不得
せすすまよすまむりあめくわもとくちうめよてばほく
やがてこよしもれづきたちものも一げくおもしかなつ

朝月日向黃楊擷。雖舊何然公見不飽

めにあらうとちやうとうあるまい
れてのを、まよが、かくはるに、様の聲
てうるさく、まよが、かくはるに、様の聲
まよが、かくはるに

默

里遠春浦經真鏡。床重不去夢所見與。
さうりゆうのうみをくわう。まどかうのうう。

春ハ吉の候。されどおやまくへ。與ハもの候。御主一。半をすよ
二のうゑか。僕牛家利。主面於所多。多々えれ。とへる方。まよれ。

真鏡手取以朝朝雖見君飽事無

まよがみてふとあそちてあやかよ。どきよ。あくこくち
せきまき。タカ。からく。おら。り。あまく。とく。とく。とく。

夕去床重不去。黃楊枕射然汝主待固

ゆすれ。どこのうちぬづけまく。いつかすれがぬ。一あらかくま
射。何の儀あるべ。かよ。う。射。は。射。と。セ。ミ。ハ。男。と。ソ。

解衣戀亂尔。淳沙生吾。戀度鴨

さき。ぬの。こひ。み。れ。つ。う。き。の。い。ま。き。こ。な。わ。が。こ。ひ。わ。る。し
古。こ。ひ。よ。じ。き。ぬ。の。る。れ。て。う。き。ま。の。う。き。く。く。く。く。
行。古。へ。ま。の。正。う。き。を。と。仰。一。浮。世。生。ハ。淫。浮。二。

梓弓引不許。有者此有戀。不相

あづき。ゆ。じ。き。ゆ。も。と。あ。ま。せ。が。か。る。こ。ひ。よ。あ。じ。き。く。ま。一。と

真

財

十二

梓

弓

引

不

許

有

者

此

有

戀

不

相

あ

づ

き

ゆ

も

と

あ

ま

せ

が

か

事靈八十衢。夕占問。占正謂妹相依

こと。が。ま。や。そ。の。ち。や。く。よ。ゆ。け。と。よ。う。ま。ま。ま。の。れ。す。よ。あ。づ。く。

事。ハ。傍。る。言。靈。く。人の。よ。き。よ。即。神。の。仰。事。ま。と。よ。ま。立。は。改。よ。や。く。

八。十。の。ち。ま。く。ハ。も。と。け。ま。く。の。傷。と。り。よ。ま。ハ。勝。と。あ。よ。と。モ。也。保。と。け。

く。じ。よ。を。ま。わ。く。

玉梓路往占。占相妹逢。我謂

た。ま。の。み。ち。ゆ。く。う。に。く。と。ば。い。か。ま。あ。づ。く。と。わ。ま。の。う。つ。

そりちと月とくみの跡よえ、往まの人のぬけ道、
死よえすとくみの跡よえ、泣かむとへりて神よのちつひまみ
めぐらのまことやうじのまこと

問答

皇祖乃神御明乎懼見茅侍徒時爾相流公鴨

神のみどり、朝延とまく、すすめ男の朝延。はまよがまく女のもくとまく。
みハ只おもてたまくる。わざわざかしよととの歌く
真祖鏡。雖見言哉。玉蜻。石垣洞。乃隱而在。纏
まきかづき。いそめや。かさうらひの。ちぶき。おもののかくれ。まゆり。
かくろひの柏樹。特と限る。はなぐ。石垣洞の。ハクナの。原。かまびつまと
はれ。まゆり。とく。まくわ延。はせ。まくわ延。はせ。

赤駒之足我枳速者雲居爾毛隱性序袖卷五口妹
あり、こやう、あがきえもん、かれゆくそくても

右二首

遠き事へ就きてあらうとす。此ニあらぬのあらざることや。今あるうちにせり。
あらざることや。とあり。室をもと、袖巻をはすよやう。巻ハ举の語え
えどあれども古よりは明奉とはすと訓る例といふ
隱口乃。豐泊瀨道者常滑乃。恐道曾。戀由眼
こかくのくよしきせじはとこなめのかくともみぢとくはゆゑ
傍を齊に浮れよ。以うるまの法より。試玉に。袖巻をハ内おろす。うえ、
かくあればもしてほりよ。あやうしくかとこよ。かくばゆめつてまづ
きこつまや。されど就きては。信向ありてとゆけよ。ゆうがさのほ

味酒之三毛倡乃山爾立月之見絶欲君我馬之足音曾為
うまきけをみとみやまふくまみのみうりきみづまのあとむらも
うまきけと相泊浦の千之八年の傍もぐれ、そいはる例す、たつ月
へてるすゆがつゆ、光の字と立ち居れまや、てつものとす一、あ
せとゆきとあくべつべ、そハ男の字ととるのとあまうを
ぬづくせひよまうの字とが爲えまう、まくはまくうむねうま
くめとくとくかくひでう

右三首

雷神小動東雲雨零耶君將留

かうるうみのたゞとよみとくわう、あすとれや、まくとどくめん
まもく小ハ光のほくしゆとまくもくとくわう、かれやとくわうのまく

雷神小動雖不零吾將留妹留者
たるかみのたゞとよみとくわう、とくとくわう、とくとく
そし小ハ光のほくしゆとまくもくとくわう、とくとくわう、四のまく

右二首

布細布枕動夜不寐思人後相物

志きたのまくもくうじまくとよきとねぞ、おまじいとふがのちとあくのもの
き物のういよ林りす、うくと教きと、いとねぞとくよ、傳えと送すとあくへう
とく物ハ無のまのまよと送れとくよ、後と傳のまくとくよ、うく
くよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよ
志きたのまくもくふひととくとくへや、そのまくもくふハ、けちひひまく

後も達らうとけく、とあへとさるハありてお詫びとひそ

左二首

前一百四十九首柿本朝臣人麻呂之歌集出
集解人
麻呂哥集也。詔曰。まくも。比め。あれ。これ。空。うえ。きく。あらわ。
トハ五十一。二。ノ。傳れ。と。れ。す。一。ち。と。又。ゆ。哥。十八。年。
のれ。え。と。れ。ハ。教。い。れ。と。つ。の。て。彼。れ。ハ。此。行。き。る。は。威。ハ。高。志。
か。き。る。哥。ト。レ。す。と。と。

正述心緒

足千根乃毋爾障良婆無用伊麻思毛五毛事應成

たゞちののえふさひハシマリヨイキト
さもソソ摩レモバトヨリテ、多モ此方より遠ニシム。至るハ

母よ優しくは仕事より成の下哉と嘆せしも。トナ
たゞもの母よまたまひそひのうあつゝ。あはれ、母君よもとてお
子之吾聲送跡自細布乃袂漬左右ニ哭四所念
心と世へゆきゆくはよせしも。

奥山之真木乃板戸年押開思惠也出來根後者何將為
れくやまのまえみのりどをぬびらきちもや、で、おののもへたすせ

サキヤウヒノイヌドツオシヒラキ
莽紀佐俱邇能伊陀囃鳴飫斯田羅枳

翁薦能一重叫敷而紗眠友君共宿者冷雲梨
かうじゆのいとくともまくさぬれどもさみそくめれはまむじくもな

墮藩丹頰經君叫率爾思出乍嘆鶴鳴

墳幡丹頬經君叫率爾思出尔嘆雀鳴
かきつまくふかくさきみをくまめよわらひいでつたうげきくつるうも
かまうすき枕背、事十卒三十アラクス木をまくのりよ、卒のひよとくそ
ひきなみふと門アモチアトといぎちとヒヌチカナヒヨアヌスボ、美モヤツム
柏御もまた人便た作日丹といつて、ちよ卒余のあきとて、ツヨカモヒテ
あきよかうきえちもすとキリユレハシトキモト、卒余のよとて、い

恨豈思狹名盤在之者外耳見之心者雖念

九三
九五
九六

將待爾到者妹之懼跡咲儀乎往而早見

まつへんふづくへりのひれみとをまへもとくとゆすとくもやくも
此事まよ、おもとめよりへはせうけみと嘆年眉卑てうひき日めゆゆす
とくと、あまんそざハ居キシ、これ、まのうとほくはくちゆく
誰此乃吾屋戸來喚足千根母爾所噴物思吾呼

神代紀々發稜威之噴讓

噴讓此云奉盧毗

未十世ながく已良例安波由久とまよ田とまよとちくとまよ

とまよ

左不宿夜者千夜毛有十方我背子之思可悔心者不持
きぬよかうよあつてもわせこのおもひくゆくまよろはまよ
婚配猶度もる者があつてあつと、わざと娶アタガリトテまよ候

家人者路毛四美三荷雖往來吾待妹之使不来鴨

えいと、みちもとすよかよどもわづまつすうづのひこぬうも

え子ハ蟹の墨、能のト一本往のまちとよくとも

璞之寸戸我竹垣編目從毛妹志所見者吾憲目八方

あら穴まのきへうたけのきのみゆいきとえまよ、わづひのや

ナナ十四速に寄アラタダマキベヤレニ、とよ、二代実

録よ此國鹿玉川よ漫三百余丈を葉アラタダマキベヤレニ、とよ、

ナナ、費平とよねまくとよ、す戸の里の竹垣とよ、あみあハ薪の

透乃へとよ、遠江の人のかう、又へ遠江のほえ、がくくと人の石

とよくとよれ

吾背子我其名不謂跡玉切命者棄忘賜名

わのせこのうのちのくとれまもるいのちハもとよきとれなす前
又安らみの棲同日命とねくをすゆのくとあく、アヤシミ

凡者誰將見鴨黒玉乃我玄髮乎靡而將居

おやすぐたうみんとすめづまわざくらふと、もじけくとく
おほくもく、ひやうてのくまくとくおやうくもくとく、まくま
あげせぬるまく、さくとじつうればんちばまくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

面忘何有人之為物焉言者為金津繼手志念者

おもれいもるいのとくのとくのとくのとくのとくのとく
馬セキ鳥ニ活レモウムうとくとくとくとくとくとくとく

不相思人之故可璞之年緒長言戀將居
あいぢむぬいとゆゑすりあくまのとくのとくのとくのとく
人のゆゑこうへくうもとものとやのとくとく言、五吉の謀ふされかまうえ考ア
凡乃行者不念言故人爾事痛所云物乎

おやうめわざハセキモヤ、あもすじとよもくく、いとれまのを
これかは男の人、うしときとせば男のとどくハぬもひどりよき
きよく

氣緒爾妹卒思念者年月之往覽別毛不所念鳥

いきのとくに、いかとくまくハとくすのゆくくんわきともおもほえのとく
いきのとくよハ、年とくげくせき

足千根乃母爾不所知吾持留心者吉惠君之隨意

たもねの、よふちくとくとくうばりをさみ、うまく

母子もあせまじて坐へ、娘のあうれす、うれすや、おおかの
ちがまもんとくわうとハヤセ

獨寝等、菱朽目八方、綾席、緒爾成及、君乎之将待

ひとよめくとくわくちあわあやむろをみるうてよきみくさく
ねぬとくのとく、菱は荷く、中まく、席は蓮く、上重く、そのときの後
蓮はきこまれて、絶体のくはぬとも、中まの轟おどりにれるま、うれば、
支子とおなせーきといつまく、おとうす、お寝ておきんとひ、往りろ
ハ後檜坐後檜坐の後の後のものあくて、前と後と儀するまく、
相見者千歳ハ去流、否辛鴨我哉然念待公難爾

ねじ、ちとねじるひう、もの、ちうせすまやとふうも、因事、てハねふじうの
もじるいきと、ううきころう、にのやまうし、半てひふうふくやゆ
きくこゆると、われやまくあくみくほれうも

振別之、髮卒短彌、青草、髮爾多え濫、妹卒師曾於母布

すわけのかみとうが、わづくとが、またくんいとくとゆりよ
振ふ舞ふ、もくハ、舞まで、舞のまと肩まくくて切く、頂よつあ方一かき
ヨケくまくとよ、されども、かく、かく、十萬千ミ、あく、脚變と
そつうじよは、すく、ねづく、驚くソビ、さう、驚きの舞のゆうと、
そ多くたぐくと、あく、あくの女とのが、つまもづく、うりうう
ユ伊とも、舞ふ、舞ふと様く、まくわき、それ、ハ年少の序の
はく小放ふ、舞まえまよとくとよを、たく、たうみく、よとたけバ
われとようよ、女の、つまもく、ほくとくとよけも

今
主
二
誤

徘徊往筭之里爾妹卒置而心空在土者蹈鞶

たかくほうゆきみのまよれいとおもてこころなづちよめども
ヒ、桃郷と下よまち、往と住とせらは邊へゆきみのまよれいと考
ぎ、半十二よま今向、さあす

若草乃新手枕卓巻始而夜哉將間二八十一不在國
わづきのあしたまくさまをうめてよをやへざむきのとくふ
すまの枕包てしづき段落まくさまをひうこま
吾憲之事毛語名草目六君之使卓待八金手六
わづきしとかもくさひちくさりんきみづづしとまもやかねてん
まくさまくさとほまぐらがくさくとくまくさまくさをあつてん
まくさまくさとほまぐらがくさくとくまくさまくさをあつてん

宿者相緣毛無夢谷間無見君忘爾可死

かくはうり。ひんのと。おとねば。すうたれと。まうぬよもあわす
かくまくぶて及よある。古をよ此すこよハちくと。孝十二世間尔。忠將鑿
政おとづねハ君のたかとをまうぬ。君も有さとふ君のたか。一えいと此寺
を出せり。ざれの是もく。

如是谷裳。吾者憲南。玉梓之君之使。辛待也。金手武

かくたれ。これ。こじやまとまづ。きみがつうしと。まちやかわぐ
まも。成入に。神。信。包。うそ。い。ア。カ。ま。む。ま。う。ふ。と。じ。孝十三、リ
ご。い。有。雙。靴。も。ひ。つい。あ。う。う。れ。ど。あ。も。ち。え。そ。く。し。と。あ。
有。き。の。法。用。く。魚。う。ひ。き。き。子。も。そ。り。そ。く。日。又。敵。と。が。き。那。む。と。お。
な。む。し。日。よ。き。う。ひ。も。使。し。と。つ。と。視。一。ま。の。と。ハ。立。く。と。す。た。が。彼。と
た。よ。き。ハ。う。ば。う。り。往。や。重。く。と。と。ア。せ。後。か。え。一。

妹戀。五口哭涕敷妙木。枕通而袖副所沾

い。も。ふ。こ。ひ。わ。つ。う。や。よ。す。き。う。と。の。ま。く。と。ほ。も。て。そ。で。ま。く。ぬ。れ。ぬ
あ。た。本。の。湯。る。よ。く。と。六。帖。よ。あ。く。の。ま。く。を。ま。く。と。も

且或本歌云枕通而卷者寒母

立念居毛曾念紅之赤裳下引去之儀辛

たちて申す。いぬ。と。そ。せ。す。れ。ま。の。あ。つ。も。を。し。い。い。ふ。ー。そ。う。と。

経。既。然。傳。よ。此。う。と。あ。す。れ。り。と。い。つ。じ。そ。う。集。中。裳。下。と。ち。く。も。す。う。

と。よ。め。る。ゆ。ゑ

念之餘者為便無三出曾行之其門宇見爾

れ。す。う。と。あ。す。り。う。と。ち。べ。を。も。み。び。と。ぞ。ゆ。そ。ー。そ。の。か。ど。と。づ。ふ
も。ハ。殊。う。つ。

情者千遍敷及雖念使辛将遣為便之不知久

こころは、ちらほらと、おもふ。つうひとやうそをくのまゝく

卷之二

夢耳見尚幾許戀五口者寤見者益而如何有
めのみよみてもしもうだふるわはうつようてはまうていうふあらん

卷之二

業而未だ西門江朱才高絕而
あひそれ、身がくまきゆかみづ
つともすまの仕事みづも

今ラ今ニ

且戸遣手速莫開味澤相見之を流君今夜來座有
あきやまとともやくはあけそあぢきりよめうわらきみのこよひかへせる

且戶遣卒速莫開門。灑相見之至。濟君令在來庵中。

あくまでよどむやうなありとおりで、
めぐらしき事にひきこもるや
あ戸でもハおのれの戸へあらきりよ松泊りほるハ人まわりひととお

手前へよれつれど極くも、室もハ既ハ視の後もく、めづらしくてみ、よもや

方解十一上 四十三

まやうもへりて、今テと今ニ何れぞ

王垂之小簀之垂簾乎往視寐者不眠友君者通達為
たまごのとよひあらとゆき、おもて、おもて、おもて

古御えあれど、ゆきからずよりまへう。従褐持楫のまの語れども

かくかけとよしと、さうはちのへまく戸の幕と拂うけて、さく

と、おひよ子、おもひそかのあまく、ゆきかごとよそへと、て、ねち

蒙古記夜周伊斯大不仇農
蒙古度之

を棄て、母白耆公毛余毛札黒羽森川年四經
たゞちねのはよますとせばまえりあひもあふとへきよとくぞへな

トヨタの事は、
さういふ事ある。

愛父等思。以篇來師。莫忘澄結之紐乃解樂念者。

はと朝のやまもんじが。こゑの

昨日見而今日社聞吾妹兒之幾許縕手見卷欲毛
きのふてゆのこゑあひがわざうこがくとくつきてすまく

まことにあがへりゆきと雪見ほきしのもい

人毛無古鄉爾有人卒愍久也君之戀爾令死

人を嫌う自らりとめく、集めよめぐるゝ事
日の暮れまへじほひづとよもよどと、いはきくへよどていて、

人役ぬちとよとあくべ男のけりとわづく
人事之繁間守而相十方ハ反吾上爾事之將繁
ひとごとの上げきまわりあてあへりとしやへやびとへふことの上げじ
人ものしきどりやくとくべー、もととくがじとあいとくとく、はぐくとく
じいとくとくとく

里人之言縁妻卒荒垣之外也吾將見惡有名園
やまとひのくとよせづまるとあかやのよそよやわづみんふくかちくふ
よしめかわくよりよしと、もと黒の後人のじいよしを妻とりてそこ
すくのうとよきとしきはようも、かくは遠方あるほとして、よ

他眼守君之隨爾余共爾夙興乍裳裾所沾

ひとめかみたまゆのまよへ。下がくよしゆかへ。かのもとをぬかれぬ

ひとをひるへ人のひもとうふよの徒以奇ニシテ出の兵あゆひと
めくを夜を早く起ておつとまし黨をそめられといふ間へく四日と
足りず車のあすこれにわれて風はつみうらじへとれ、たの徒はう
ふとうてはやくとよし。

夜干玉之妹之黒髪。今夜毛加吾無床爾靡而宿良武
ぬがまのやうびくろかこよのものわかれきとことよじけてぬくん
ゑ多きとくちういじせくばくぬまくとせじてリヌミナゲケの
けハかせの約。

花細葦垣越爾直一目相視之児故千遍嘆津

あれぐりあいかづこよだいじめあひそーこゆゑぢくひもぐさつ
八事人のぬの衣とほじよどく、じこいしよむねとぬくよ一みえ
くるとりえ元恭紀波那具波辟佐久眾能梅涅と衣通照と琴

色出而戀者人見而應知情中之隱妻波母
いとうよひて、むかひて、むかぬて、こころのうちのことをつまむも
いづり

相見而者戀名草六路入者雖云見後爾曾毛戀益家類
あひそーひくひくとひといでみてのちふくもこいまううけ、
くく反ふもるもくごとほくもくせんちうく

凡吾之念者如是許難御門卒退出采也母

おひづよわ行ゆくがくばうかくまうかくまとまつりでくらやむ
かくまみくハ葉裏の佛門のむの姿うつむとよのゐるまくの
思ひくぬづれまくまくはまくふとう退とつ

將念其人有哉。烏玉也。每夜君之夢西所見。

れりくのいとされや。ぬぐま。よど下きて。いめうすゆる

お早ヤリ人ちよて。ハシマニト。モモモモ。

或本歌云夜晝不_{ヨル}五感渡

如是耳。戀者可死。是乳根之母毛告都不止通為。

タノミヒ志ぬ。たらちのもくもつけつやまもいかよせ也

トキナタムテ。タリアタクバメモキテ。アツシテタヌセ

ミテ。

丈夫波友之勝爾名草溢心毛將有我衣苦寸

まことと。のやかに。うきのうと。あんと。こひがく。き

出晴。まのまく。いり。もあれば。まく。と。う。と。う。

ミタキハ。う。の。ま。の。ゆ。を。因。の。う。れ。り。と。る。こ。く。は。

文
大
誤

偽毛似付曾為。何時從鹿。不見人戀爾。人之死為

つそふつまく。もふ。い。下。す。く。ぬ。い。こ。よ。い。と。の。志。み。や。

何。の。は。う。と。う。と。う。と。高。た。か。と。ま。の。あ。く。と。め。つ。の。は。う。

情左倍奉有君爾。何物守鴨。不云言此跡。吾將竊食

ミタキ。まく。せ。き。み。や。ふ。と。か。い。を。び。て。い。じ。と。わ。が。ぬ。と。ま。く。

キ。十。三。空。よ。奉。と。て。こ。そ。ん。年。ハ。リ。と。門。て。奉。の。古。往。た。て。き。と。西。ま。く。

ソ。く。ぬ。と。ま。く。い。め。ま。ん。と。先。ま。う。う。と。ほ。ん。と。う。と。同。じ。此。の。空。ハ

い。う。う。か。ヨ。く。う。ハ。よ。ま。か。の。か。さ。う。一。脚。の。下。手。ハ。之。の。往。ま。う。ま。に

一。う。う。う。う。一。空。ま。い。す。

面忘太雨毛得為也登手握而雖打不寒憇之奴

おもやまくへゆきえまや。たぶさうてうてどくこわくとことのやつを
あらそとまよふとほやうとく、半十二拾石も得る也ももひあ
そりとく、わらうとまよふとくへんとしきとくまで、御くくわく、
まくわくとまよふとく、すたべ、まの奴のつゝひもととしりく
ゑと奴とて百う四まん寒、凝まとへ懲りぬつり、寒一本塞よが、
うてときつじとよとく、一をの万まよふへ

希將見君。卒見常衣。左手之執。乃方之眉根。搔禮。
りつゝき。みとみんともじ。ひすてのゆみともかくのまゆねかき。

中印紀序見山云梅

山
水
梅

門で、たの眉根のかゆまればへよ遅くは誘ひてす。方へてうき物のと
わきくわくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

真了莫

人間守蘆垣越爾吾妹子子乎相見之柄ニ車曾左太父守
ひとまわすかをきこふわきことあしよーうに、とせけふちやく
ひとまわすかのひまとうじてくも、ゆりもはもあす此左太之を及
えりんやと、りく人のひまうりとを、りくと、りくをくふ
ひまゆく人のひまうりとア人のひまうりと、四十と定めく
きもほくと、りくの、ほれぬよきも、うどいと、日もく
今谷毛目莫令之不相見而將戀年月久家貞國
まくらしめあると、めうてあひと、もくと、まくら
おもむかみくすのうと、りそハおなまうと、あせうと、りそ
真と、本莫とせず、一をすそはつひくけまくふト久とまと近

朝宿髮吾者不梳。憂君之手枕觸義之鬼尾。

あやねみやれへたゞく。うづくまみのれまく。うれてものと
おもてのこゝへだまへと逃り去り、義之ハ義之の湯を改めしつ
早去而何時君乎相見等念之情今曾水葱サ熱
ちやゆまでいつのきみとあいへんせりひくつともすとみさぬも
あは蝶とリ、由葱サ熱前とゆきのゆすりありふの和わゆとま
面形之忘戸在者小豆鳴勇士物屋戀乍将居
おもてのやどもくちのあぢまちのよどかのやこじとらん

面形之忘戸在者小豆鳴勇士牧屋憲尔將居
ゆくがのわらきちくあもりさちくとのうぐわのや
室もと戸は豆の屋すくわられてもくまくべつて
えれ、のととこ半十四才モオガタツリスレベニケ
小豆もと豆の屋と是常とある事とく
ものハ改よつゝ

卷之十一

の事は之がおもての事であつたやうだ。ちくしきの事はちよつと
耳にした事がある。言ふいたやうな事は、それで誰もいふ
人東方音を考へてゐる。日本語の發達の歴史を考へて、日本語の
歴史を考へてゐる。

小豆奈九何枉言今更小童言為流老人二四年
あぢまちゆくがみのたひとまことふわいじとよすて
枉枉の傍へゆき改よひとをくのうじゆきしゆくを
ひのよひとまこと自らりと

相見而幾久毛不有雨如年月所思可聞
あひそてへづくひやうすあちよづきのこくぬほゆるのし
はうのゆ向てまよりとあはせ、アヒミニハ三不れり者幾久もあちよづく
あれ、相のと木のまみづくして、あひみまとてづく

丈夫登念着吾卒如是許令戀波小可者在来

まくをとめりるわれとかばらしむらべよさわら
小可ハノベリトシタク者ノモトシヨモニベシハム
シテリギ少可二字苛の字のほちモベニシハからくハあつれ
ミリベモ

如是為乍吾待印有鴨世人皆乃常不在國

カクツワシタマトモアシムシタマシム
命のほりされねハチカヘキサスミシルヒアレハリス
不有トアリキト不の字と男カシム例集サヌキ

人事茂君玉梓之使不遣忘跡思名

ヒトビヒエビキミタマズアシヤシモヤシモヤシ
大原古郷妹置吾稻金津夢所見乞

おほりのよウシ一きよみけとおきや、やれぬうつ、いよみえこう
大原八十郎殿、幕原の都のあらんを良と都をうまれてかどる
キナ

夕去者公來座跡待夜之名凝衣今宿不勝為
ゆづれバキミキマシムトモアシムシタマシム
モ十二ヨ一二の匂、玉梓のあう使とモ、未令因アシム、なごりハ次干
ムシテリコロリの跡モアシムトヨドリトモ、時々ハ物の跡モ
シテリコロリの跡モアシムトモ、時々ハ物の跡モ

不相思公者在良思黒玉夢不見受旱宿跡

あじお、ばきみアムル、ハタマ、イメシムミテモ、うきじてめれ
ラクビハシハ新ハ神武紀是夜自祈而寢、旱ハ日手ニ字の「一」字もほり

スと空表ひす

石根踏夜道不行念跡妹依者忍金津毛

いもすよろちハゆうとせれど、いわふすて、まもじうなつ
シタとみよ人のうゑへはるハねまじあら

人事茂間守跡不相在終八子等面忘南

ひとごとのおげさまさるとありてあづひやこう、おわせりん
人きのうすとちとうて、あぶほよ、おとめとめがを
きんと

戀死後何爲五呪生日社見幕欲爲禮

こひまんのちにやせんわづひもいけるしきことみまくりうまれ
まくまくにははくもんいの日のみ、とえまくりうまれど
令甲

穀細枕動而宿不所寢物念此々急明鴨

まきたのすくうごすて、おらうで、ものよこし、もとあくらも
よのく、まきかがまく、をはく、まく、あくねく、あけく、く、不れと
まくまくとふと男まくハ例

不往吾來跡可夜門不閑。何怜吾妹子。待筒在

ゆうぬきをうとうするがどくすあれわざこまくらつあくん
まくまくゆうなれと、まくまく、づとまくと

卷十一上追加

新室壁草、陸奥南菴の黒川盛隆が、もく、延喜式七跋祚大嘗祭式云、所作新殿一字、畧並以黑木及草構葺、壁節以草三つあれば、是壁草也。一といふ、又曰、周造竈の藤嶽知明が、いすハ彼あり。又、とハ、新室を乞へ、壁草も、いまだぬるほど、、莫と間くも厚とからしむ」と、

壁草とハナメアリ記

○人妻始藤原淡臣が、いそく、此始をゆゑとよゆるハ、其事未よ珍海ミ人子始、けく、或本歌、人見故尔、卷十二より始とゆゑとよゆる二三、も、と始ハ始の訛ニ、たるよハ集教炉都故切始同と云ひ、多く、字ち小ゆゑとよび、セヨ、ハ、あれど、道仙窟工、無情明月故ニ臨窓、ア、あぢやなきあづあけづきのみぞ、ねたま一げよあざへしもと川セテ、字院故ニ、秋太今尔又、と云、乞イ字すち小故ニ、始炉の義と云せらるりと、
已止太戸

いと、勢すよ、故姫うにま声みて、遇暮の歌のまよて、いふへ、故姫通
ト用ひりあとひゆやれ、互よおみ、とて、ゆあとりふも姫の字と用
ひあきし、じの字ち小、をもとて、たまくみし、道仙窟、又
吾園の古ち小、あはるを、まくへをひる候もとましの字かど、
唐以前用ひ、字と送海、人、字多からむらでるるをもといふ、あ
るす、いわ、さも音び、

卷十一上

万解十一上 追加

